

詩 追憶のカイロ (13)

懐かしいカイロの情景を思い出させてくれるとよださなえさんの詩集『子供のピラミッド』（2019年8月出版）からの詩も、いよいよ最期になりました。これから寂しくなります。とよださんには、カイロの詩でなくても、これからも詩を掲載させてくださいとお願いしていますが、ご体調のこともあって、なかなか難しいようです。でも、時には優しい贈り物があるかもしれません。

今回の詩では、とよださんは、いろいろな思いを心に沈めて、いよいよシナイ山に登ります。私も1991年にシナイ山に登りました。ラクダに乗らず自分の足で登り、下山も修道士が使うという反対側の山道を滑りながら下りました。とよださんはいつ登られたのでしょうか。私が登ったときは、30年も前ですが、もうイスラエル兵の姿はありませんでした。もう一度、今度はとよださんと一緒に登ってみたい…シナイ山、モーセの山。私たち、二人とも年を取りましたね。とよださんと私、せめて思い出を温めましょう。（塩尻和子）

とよださなえ

シナイ山へ II

そそり立つ岩の前に来た時
ラクダ使いは ラクダの膝をたたませ
客である私を 降ろした
バクシーシをせびることもなく
約束のお金を受けとると
先着しているラクダが
並んで座っている日陰に
ラクダを連れていった
一仕事が終わって くつろいだたはずまいの
一人と一頭
商売としての自然な流れに
長年のルールが見えた
シナイ半島は
エジプト人がきても
ペルシャ人がきても
ギリシャ人、ローマ人、トルコ人がきても
イスラエル軍がきても
ベドウィンとラクダのなりわいは
変わらなかったのだろう

シナイ半島に立つ為に
タバで
エジプト入国の手続きをした
イスラエル側では 相変らず
小意地が悪く つっけんどん
一本道を百メートル位行くとエジプトの事務所
気の良さそうなおじさんが
さし出した書類を 無器用に
処理してくれた

二十七年前の
第四次中東戦争の数年後
イスラエル兵とエジプト兵の
遺体の交換が行われたのが
シナイ半島だった
キッシンジャーが暫定的に作ったという
停戦ラインにインドネシア兵が並び
両国の棺が運び出された
あの時は
このシナイ山は
イスラエルの支配下だった
自分のいる場所の国名が変わってしまっても
ラクダもラクダ使いのベドウィンも
今のように
ひょうひょうとしていたのだろうか

カイロ外国人記者団のバスに同乗して
スエズ運河を渡り
じきに目にした
まちまちの方角を向いたまま
壊れて ころがっていた戦車たち
あれはここから
どれ位離れていたのだろうか
地図の上では すぐ近くに
見えてしまう
モーゼとイスラエルの民が四十年
さまよった土地

大岩のうしろにまわり

いよいよモーゼ十戒の山に登りはじめた
一説によれば もう一つ
モーゼ十戒の山というのがあるという
まずは一つずつ 一歩から
登り口が色々あるのだろうか
一本の山道という訳でなく
それぞれの斜面を人々が登っていた
木一本はえていないから
人々の動きが良く見えた
私の第一歩は粗い砂まじりの岩の上で
すべりもせず しっかりと踏み込めた
その踏み心地を味わうように
一歩一歩登っていった
下を見ると
観光用の写真の通りの
エリアの泉と呼ばれるオアシスが
糸杉と水までも緑色に見えた
澄んで緑なのか よどんで緑の水なのか
しかとはわからなかった
上の方には
登山部にいたという同行のK夫人の姿

この一歩一歩は

エルサレムのヴィア・ドロロッサ^{*}で見た
貸し十字架屋さん
イエスが十字架の重みで倒れこみ
その時についた
手形の跡という壁を思い出させた

聖墳墓教会の中には
ギリシャ正教
アルメニア正教
コプト教が重々しく それぞれ別に
黒ずんだ祭壇を作っていた
ローマ・カトリックは
隅の方に 十字架のみを飾った
シンプルな祭壇
宗派どうしの喧嘩をみかね
教会の鍵を預っているのは

パレスチナ人のイスラム教徒という
プロテスタントは教会とは別の場所を
イエスの本当の墓地としている
私が見てきた南米のカトリックの教会は
ロシア正教のようだった
祈るということへの問

エルサレムにいても
ユダヤ教 キリスト教 イスラム教の
三つの聖地
国境を越えて
シナイ山にきても
モーゼが
三つの宗教を繋ぐ
コーランの中に
マリアやモーゼが出てきた時は
驚いた
カイロに住んでいた時
近所のエジプト人が 東洋人である我々に
「私はイスラム教徒でなく クリスチャンだから
嘘はつかない」と言った
それが明らかに嘘とわかった時の驚き
恥ずかしさが悲しみへ

わたし以外に神があってはならぬ
偶像を刻んではならぬ
神の名をみだりに唱えてはならぬ
安息日を憶えて これを聖く保て
父と母を敬え
殺してはならぬ
姦淫してはならぬ
盗んではならぬ
隣人に対して偽証してはならぬ
隣人の家を貪ってはならぬ
(出エジプト記二十章)
安息日には奴隷も家畜も休ませろという
日本の嫁である私には
夢のような言葉
しかし安息日に仕事をしたり
火をたいたりしたら

だれでも殺されなければならない
（出エジプト記三十五章）
殺してはならぬという戒めとの間に
疑問を持ってしまう
一神教の信者でない私

海拔二、二八五メートルという高さの
どれ程に登ったのか
荒布の上に小石を並べ
売っているベドウィンがいた
泊っていたホテルの壁に
嵌めこんであつたのと同じ
草模様の入った石
モーゼの石板と同質なのか
白い平らな石
自身の記念と くばり用にいくつか求めた

馬の背中のような一本道を行くと
石の小さな建物に十字架がついていた
ギリシャ正教のものだという
麓に 聖エカテリーナ修道院があるので
合点がいった
そちこちから 讚美歌が聞こえてきた
十人位のグループが
それぞれの国の言葉で歌っていた

なぜか白人ばかり
頂上についたらしい
岩の足場から遠くを見ても
岩の山々
ドイツから来たという若いカップルは
朝日を見るのだと
背中の寝袋の装備を見せてくれた
つまり 御来光様を拝むのだなど
うれしく 納得した

※イエスの悲しみの道